

オランダ近代経済史の一問題点(四)

内田直作

七 結 び

- (1) マックス・ウエーバーの見解
- (2) カルヴァン主義とアルミニアン主義の論争
- (3) 両派の対抗・阻止関係
- (4) 賤民資本主義の問題について

(1) 「マックス・ウエーバーの見解」≡ウエーバーはアルミニアン主義については既述の通りほとんど述べるところがなかった。「プロテスタントイデオロギイの倫理と資本主義精神」の第二章「禁欲的新教主義の職業倫理」の劈

オランダ近代経済史の一問題点

頭の註(1)に次の通りに触れているにすぎない。

「アルミニアン主義は尖鋭的な表現における予定説の否定を教義上の特質とするものであり、<sup>7</sup> 世俗的禁欲<sup>8</sup>を忌避したのであるが、教派として組織されたのはオランダ（および合衆国）のみにおいてであつて、本章では何等の関心——たとえばそれがオランダの商人貴族の信仰であつたという消極的関心——をもつものではない。（後述参照）。その教義はイギリス国教々々と大多数のメソヂスト教会によつて採用された。しかし、その“erastianische”な（すなわち、宗教上の事項についての国家の主権を是認する）立場は政治問題のみを取扱ふところの全裁判所・イギリスの長期議會をはじめ、エリザベス女王、オランダ、ことにオルデンバルネフェルトの立場であつた。<sup>9</sup>」

それにつづいて、カルヴィン主義が一六・一七世紀のオランダの政治的・文化的斗争の原因となり、オルデンバルネフェルトの文化斗争の失敗に帰したのは、カルヴィン主義のもつとも特徴的な教義の予定説＝Gnadenwahlを否定したためであるとの叙述がみられるにすぎない。

ドルトレヒトのカルヴィン派の宗教会議（一六一八—一六一九）で予定説を拒否するアルミニアン派の教義は異端として宣告され、一六一九年アルミニアン派の領袖のうちオルデンバルネフェルトは処刑され、グロティウスとフーヘルベートは無期禁固の判決をうけ、ギル・デ・レーデンベルグは獄中自殺を遂げた。<sup>10</sup> だが、このカルヴィン派のクーデターは一時的勝利であつて、一六二五年以降アルミニアン派支配の復帰をみた。

ウエーバーはアルミニアン主義に何等の関心を示さないうで、それがカルヴィン主義の予定説と世俗的禁欲を否定したとして彼の禁欲的新教主義の枠外に捨てさつてゐる。ウエーバーがその大著「宗教社会学論文集」＝Ges-

ammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, I, II, III, Tübingen, 1920. において新教倫理のみならず、中国の儒教と道教、インドのヒンドウ教と仏教、さらにユダヤ教の世界の五大宗教の比較観察を試みるにいたったのは、欧米社会とアジア社会との経済的發展の相違を動機づけ、唯物史観の修正を企図することであった。

ウエーバーはマルクスの唯物史観における経済の世界の変転とともに観念的上層建築が変化するという命題を非難して、事實はそれほど簡単ではなく、一度上層に醸成された観念の世界が、さらに下層建築を規定してゆく作用の存することも見逃しがたい。あらゆる事象の歴史的観察に際しては、経済の基礎的重要性に顧みて、まず経済的条件が顧慮されねばならないが、またそれに対する逆の因果関係も無視さるべきではない。したがって、我々が唯物史観によって説明しえられない不合理な事象を遭遇した場合、かかる特定の事象については、これを逆に心理的方面より観察してその解釈をなすべきである。すなわち、かかる特定の事象を生むにいたらしめた人の心理的現象の解明が必要であるとす。今、このような心理的観察を試みるに際して、比較民族心理学・比較民族心理学—die Vergleichende Rassen—Neurologie und—Psychologie が充分に発達したならば、多分満足な結果がすべての問題に対してえられるであろうが、現在のところ我々の有するもっとも可能性ある認識手段としては宗教のみである。<sup>4)</sup>

過去の歴史において人類の現世に対する態度、すなわち処世方法の形成に対して重要な役割を果した要素は、宗教的方面、すなわち魔術的諸力、あるいは信仰として硬化したところの倫理的義務観念であり、それ等は過去の人々の性格を探ぐるにもっとも有力な我々に与えられたところの世襲物である。なんとなれば、宗教の発生起

源は純粹に心理的 *reiu psychologisch* であるからである。<sup>(6)</sup>

もちろん、宗教の特質は政治的・経済的に条件づけられて、社会的影響をうけていることは否定されないが、しかし、それはその宗教の支持者である社会層のイデオロギーでもなければ、その物質的利害関係の反映でもない。個々の場合の宗教倫理に経済的・政治的に条件づけられた社会的影響がいかに深く作用していても、それは、——第一次的に宗教の起源、すなわちまずその告知 *Verkündigung* と約束 *Verheissung* の内容からその特質をうけている。それが利害関係によって影響されるのは第二次的においてである。<sup>(6)</sup>

従来において、宗教倫理は種々な利害関係との連繫について、前者は後者の一つの作用として発生するものであるとされたが、今ウェーバーはかかる唯物史観の立場というよりは、全然純粹心理的立場において宗教を理解する。ウェーバー研究者の一人であるトニー *Richard Henry Tawney* がその著「宗教と資本主義の興隆」 *Religion and the Rise of Capitalism, A Historical Study*, London, 1948 に於いて「一面的、唯物論的、文明観、歴史観を同じく一面的な、唯心論的、文明観・歴史観におきかえよう、などと考えたのではなく、それぞれか、彼はきっぱりとこのような種類の意図を斥けたのである。」<sup>(7)</sup>と述べていることはまさしくその通りであるが、前述のごとく宗教の発生源を純粹に心理的であるとして、唯物史観的解釈に反駁したことは忘却されてはならない。具体的には、たとえば、中国の宗教の「儒教と道教」観察につづく儒教と清教の比較検討の終末に、ウェーバーは結言して曰く「この場合の、心情」 *Gesinnung* の基本的諸特質、すなわち現世に対する実践的態度が——それは確かにその発展に際して政治的・経済的諸条件によって制約はされたが——なお資本主義的発達の阻止に対して、その自己法則性 *die Eigengesetzlichkeit* ともみなすべき作用が、つよく関

与していたことは容易に否定されないうであらう。」<sup>(8)</sup>として、彼は中国における近代資本主義未発達の動機を心理的側面、すなわち読書人の支持した儒教倫理のうちにこれを求めている。<sup>(8)</sup>

何れにもせよ、彼の観察するところの宗教は、経済倫理としての宗教であり、宗教の経済倫理が何を意味するかは、彼の精緻な理論構造からなるその叙述のうちにおいて自ら展開され、かつ了解されるべきものであるが、要するに観察されるところのものは、単なる宗教の神学的綱目の倫理々論——それは認識手段としては有用ではあるが、——ではなく、むしろ宗教の心理的・実用的の連繫にもとづくところの行為への実践的動機についてである。<sup>(9)</sup>すなわち、それぞれの宗教倫理、たとえば中国における儒教と道教、インドのヒンドウ教、欧米社会における新教主義、ユダヤ教等が、経済倫理としてそれぞれの経済形態の発展に対していかに寄与したかを観察し、それ等の認識をさらに明確ならしめたために、その大著宗教社会学論文集のうちにおいて、彼の厳密な方法論の一部を構成する興味深い比較観察を試みている。以下、本論にかえて、カルヴィン主義とアルミニアン主義の対立関係をまずその宗教論争からみてゆこう。

(2)「カルヴィン主義とアルミニアン主義の論争」<sup>(10)</sup> 〓アルミニアン主義は既述の通り、ライデン大学の神学教授ゼームズ・アルミニウス<sup>(11)</sup> James Arminius (1560—1609) がカルヴィン派との宗教論争のうちにたてられた教義であった。ライデン大学教授に就任するとともに、アルミニウスはカルヴィン派の神学教授で激情家のホル<sup>(12)</sup> Franciscus Gomarus (1563—1641) に遭遇して、両者の間に激しい宗教論争が展開され、それはアルミニスの死後一六一八年十一月から一六一九年五月にかけて開かれたドルトレヒトの宗教会議<sup>(13)</sup>にまで持ちこされた。

オランダの土着派の上層教養階級にはロッテルダムの神学者のエラスムスの人道主義的思想が浸透しており、エラスムスが意思の自由・法皇政治等をめぐる諸問題で、ルッターとのほげしい論争を展開した結果、オランダの知識層はこのドイツの宗教改革家の教義よりも、フランスからの宗教的避難者とともにはいりこんでさえカルヴィン主義をうけいられた。<sup>60</sup>だが、カルヴィン派のあまりにも戦斗的で、硬く不寛容精神に対し、土着派はつよい忌避をあらわにするようになり、その恐るべき教理の修正・緩和がライデン大学神学教授アルミニウスによって完成され、アルミニウス主義の形成をみるにいたらしめた。アルミニウスの逝去の年にアルミニウス派のバルネフェルトはスペインとの一二年間の休戦条約の締結に成功したが、この休戦期間にカルヴィン派は鋒先を国内の同系統のいわば修正カルヴィン主義の新教徒のアルミニウス派に向けて、はげしい宗教論争と国内紛争を導いていった。カルヴィン教徒のホマル派＝Gomarists は自らの教区からアルミニウス派の牧師を放逐し、カルヴィン主義に違背するものすべての追放をもって脅かしたことからして、アルミニウス派の抗議提出となり、ホマル派はその反対抗議をもって回答した。前者は抗議派＝the Remonstrants 後者は反抗派＝the Contra-Remonstrants としての対立抗争が展開された。両派の宗教論争には政治的対立が交錯していた。ウイリアムの王子モーリス＝Prince Maurice は信仰上よりも政治的理由から、ホマル派に加担した。アルミニウス派のバルネフェルトやグロティウス等は諸州の自由を援し、主権獲得を企図するモーリスのホマール派に敵対していった。<sup>61</sup>

一方、一七世紀頃の両派の宗教論争の結着はドルトレヒトの宗教会議でつけられ、アルミニウス主義は異端として宣告された。同派の領袖バルネフェルト等がクーデターにより処刑・投獄されたことは前述した通りであ

る。その論争の内容は半年余にわたる一五二回の同会議の議事録に明らかにされるが、今デヴィレスト＝David D. Demarest による要約を、さらに簡潔化すれば次の通りである。<sup>133</sup>

(1) 最初はカルヴィン主義の恐るべき予定説＝Predestination についてである。神は罪すべきものを定めたまうのではなく、むしろ悔い改めなくとも罪に値しないものを滅ぼさしめたまわないのである。すでに、この世の罪多き人々のうちのそこばくのを、神のみこころと慈悲によりえらびて救いたまう。すなわち、これ選びの説＝Election である。その他の自らの意思でこの世の常の悲惨のうちにとびこみしものは、そのままに捨てざるべきことを告げたまうた。すなわち、これ遺棄説＝Reprobation である。だが救われるかわらない。ただ、それは神の恩寵のえらびにしたがうが故に。罪の罰するに値するもののみが滅びるのである。

これに対し、アルミニアン主義も選びの説を主張するが、右のカルヴィン主義のごとく、選ばれる人の善・不善にかかわらないで、神のみこころにのみしたがることを否定する。選びはその人の先見の信仰・懺悔・善行にもとづくものであると主張する。予定説は人の生れおつる以前のことであるが故に正しくない。神には過去も未来もなく、ただ恒常的な現在のみがあると考えられるからである。そして自ら罪を犯すと、神にしたがうと、何れの場合にもおける人の意思の自由を強調する。

(2) 第二点はキリストの死についてであって、アルミニアン主義ではキリストはすべての人に対すると全く同様の意味で没くなったのであって、神はその意味ですべてのものを満足せしめるものであると主張する。すべての人の罪に贖罪はみちたりたものであり、その恩恵は自由、かつ誠真にすべてのもの

に与えられる。その上にも、キリストは死に際して人々の救済にとくに関心をほらいたまうた。すべてものを導きいれ、救われようよう戸を開きたまうのみならず、多くのもの入り来ることを安からしめんとしたまうた。

(3)・(4) 第三点と第四点は人の堕落とその神への信仰に關してであつた。カルヴィン主義もアルミニアン主義も、人の性質の堕落とその悔い改めに対する神の恩寵の必要を信する点では共通する。だが、兩者には相違がみられる。カルヴィン主義は人々はすっかり堕落しきつてゐるから、特別の恩寵がなければ、神への信仰に帰らえないで罪のうちに正当な理由もなくして滅びさるであらうし、他方救われるものは神の特別、かつきわだつた慈悲の恩寵に浴するのである。さらに、カルヴィン主義ではとくにその力を授けたまうて、悔い改めの時と仕方、ならびにその恩寵を浴しうる民をそのみこころにしたがつて、えらびたまう支配者が、とりもなおさず神を意味するのである。

これに対し、アルミニアン主義は神はすべてのものにひとしく恩寵を与えたまうのであり、人々はそのめぐまれたる能力にしたがつて、それを促進せしめればたりるのである。したがつて、その場合、帰依者と非帰依者の差は前者は兩者にひとしく与えられた恩寵を促進せしめて、救済の地位に到達したものであり、後者はそれを促進せしめなかつたということにある。

(5) 第五点は窮極救済 *The Perseverance of the Saints* に關してである。カルヴィン主義では、帰依者は神に背く悲しむべき罪に陥りがちであり、その罪をうけるが、神はなおみ心をかけたまう。神は朽ちはてざる種子をのこし、誤れるものを悔い改めに導きたまう。神はあらゆる困難を通じて彼らを



導かれ、聖典と律法できよめられ、窮極にいたるまで力づけたまい、色褪せぬ王冠を授けたまう。

アルミニアン主義では、逆に信仰者の窮極救済の保証はないのである。誠実な信仰者でも、まことの信仰から離れ、まことの正しい信仰に一致しないような罪を犯す場合がある。まことの信仰者が目にあまる罪や、残虐な悪行におちこむおのがあやまちによってその中に耐え、たおれ、窮極には死滅する場合があるとする。

右は伝えて十分ではないが、一応ウェーバーが触れることを避けたドルトレヒト宗教会議の論争の要旨である。右にも汲みとられるごとく、アルミニアン主義はカルヴィン主義の予定説、ないしは恩寵の選びの説を否定し、神秘性を捨て、意思の自由を認め、窮極救済をも否定している。アルミニアン主義には俗人に難解な神秘的教義はなく、カルヴィン主義の恐るべき教理を捨てて、平面的な実践的・倫理的信仰、もしくは平易・簡明な福音につたえられるような、実践的道德主義の特性を備えている。その教会の教義は複雑かつ人間社会や信仰に有害な構成をもたないで、むしろほとんど教義を必要としない合理主義の影響力のつよい単純な俗人キリスト教信仰＝*laienchristentum* とともになされるものである。それだけにオーギュスティン主義にみられるごとき宗教的深さ・力・内面性に欠け、深い罪のおのきはない<sup>104</sup>。土着派の指導層のエラスムスやオレンヂ公ウイリアム・アルミニウス・グロテイウス等は、何れも激情的なケルト族のカルヴィン派とは相違して、冷静で平和愛好の気質の保持者であり、それがその教義のアルミニアン主義に反映せしめられている。

一方、カルヴィン主義はウェーバーが禁欲的新教主義と職業倫理を論ずるに際して、最初にとりあげた信仰であり、そのもっとも特徴的な教義の、恩寵の撰びの説＝*Gnadenwahl* の文化史的影響の意義を高く評価する。

ウェーバーはドルトレヒトのシノードの論争には触れないで、一六四七年の「ウエストミンスター信仰告白」<sup>65</sup> Westminister Confession を典拠として、カルヴィン主義の内容について論じている。その恐るべき教理 *derectum horrible* の撰びの説では、人は永遠の昔から定められた運命に向って孤独の道を辿らねばならなかった。何人も彼を救けることはできない。伝導師もしかり、何となれば、ただ撰ばれたもののみが神の言葉を靈的に理解しうるからである。聖礼典も役立たないとして、カトリックの教会と聖礼典とによる救済を完全に廃棄して、魔術的方法を迷信とし罪惡として排斥する。

カルヴィン主義には探求しがたい超世的神意があり、超世神と創造的に墮落し、倫理的に不合理な現世に対する関係の結果、伝統は神聖ならざるものとされ、さらにそこには所与の世界の倫理的、かつ合理的克服と支配のために、始終繰返えされる労働の絶対的な絶間ない使命、すなわち「進歩の合理的客観性」が存在する。このような現世の合理的支配を心情的に裏つけるものが、カルヴィン教徒にみられる激情<sup>66</sup>である。最終的に心理的に根拠づけるのがウェーバーの論旨である。

その経済生活が個々の善行としてでなく、組織として高められゆく一貫する実践的態度からして経済的合理主義、ひいては近代産業資本主義の成立をみるにいたらしめるとする。オランダのカルヴィン派については、既述の通りの贅沢品諸産業の技術を導入した功績と、ユースリンクスの近代産業資本主義的企図を実現するために創設した西インド会社がそのみるべき成果としてあげられうる。

だが、これ等の成果も英・米におけるカルヴィン主義の成果に比較する場合ほとんど問題とはならなかった。オランダにおけるカルヴィン派の激情は経済的合理主義の実現よりも、対外的宗教戦争と国内的宗教紛争の、余

りにも不寛容なその戦斗的態度からして自壞的に後退していった。八〇年間にわたる独立戦争は小国オランダの堪えがたい負担であり、アルミニアン派の締結したスベインとの一二年間の休戦期間（一六〇九—一六二一）には、カルヴァイン派は国内的にアルミニアン派との宗教論争と迫害に転じた。ドルトレヒトのシノードでアルミニアン主義は異端として宣告され、その領袖達は処刑・投獄されたが、この余りにも苛烈なカルヴァイン派の態度からして、人民の多くはむしろアルミニアン主義に同情を示し、カルヴァイン派のアムステルダム単独支配の期間を僅か七カ年で終了せしめた。さらに、国外ではイギリス教会は真最初にドルトの教典を廃棄し、フランスとドイツの新教徒達は驚きと悲嘆の表明をし、セネバのカルヴァイン教徒すらがシノードの宣告の承認を拒絶した。アルミニアン派自体も、その宣告によって殺害されることを拒否して、一一年後に宗教会議はその銘記される生涯を閉じた。<sup>44)</sup>かくて、宗教史上かつてないその苛烈・頑迷・不寛容で名を馳せた宗教論争は幕をおろした。

カルヴァイン派のモーリス＝Prince Maurice についで、一六二五年フレドリック・ヘンリー＝Fredric Henry が七州最高長官＝Stadhouder に就任するとともに、追放されたアルミニアン派の宣教師達は教会に復帰し、少数の教派であったが、その教義は広くオランダにおける新教徒諸教会にゆきわたり、さらにオランダ国教会の多くの牧師と会員達の間にもうけいれられていつて現在におよんでいる。<sup>45)</sup>シノードでは、ウェーバーのごとくカルヴァイン派の勝利をみたが、長期的にはオランダでは同派はアルミニアン派に屈服したものといつて差支えない。前述のうちにも明らかにされる通り、一七世紀のオランダでは、カルヴァイン主義は宗教的・政治的・経済的に実生活への浸透に十分な成果をあげえなかった。オランダにおけるカルヴァイン主義の弘通力の弱かったことについて、ウェーバーは、その原因の一部分は、その国の政治組織（個別主義的州・市同盟）と、武力の

はるかに弱かった（独立戦争は間もなく主としてアムステルダム の貨幣と傭兵をもって行われた。イギリスの僧侶はオランダ軍隊におけるバビロンの言葉の混乱について例証している。）ことにもとづくとしている。<sup>(3)</sup>

たしかに、オランダが強力な中央集権体制に欠除していたこと、土着派の海上勢力を除けば、少数の人口、狭少な国土、自然条件的にも防禦力をもたない国名にも明らかにされる平坦な低地＝Holland：Hollow Land, Nederlanden で、その最後の抵抗力は防波堤を切っておとす自滅的な洪水戦術しかもたなかったことからしても、ウエーバーのいうごとく、カルヴィン勢力拡大の基盤に不足していたことはいうまでもない。

さらに、カルヴィン派が経済的にも十分にその脚足をのばしえなかったことについて、大塚久雄教授の場合のごとく、アルミニアン派が前期的商業資本の立場において、ホマール派の近代産業資本主義的發展に対抗・阻止の関係にあったことに帰せしめられるとの見解がみられる。<sup>(4)</sup>

(3) 「両派の対抗・阻止関係」Ⅱだが、現実にはむしろ逆に理解されるべきであろう。ケルト族のカルヴィン派と土着のゲルマン的アルミニアン派との間に宗教的・言語的・人種的対立があり、南方オランダ（今日のベルギー）におけるカルヴィン系のワロン＝Wallons とカトリック系のフラマン＝Fiamands との今日にいたるまでのほげしい対立と共通するものがみられる。<sup>(5)</sup> だが、ベルギーの場合とは相違して、今日のオランダではこのような複合社会的対立は緩和されている。すでに、当初から宗教的避難者達には信仰の自由のほか、市民権が与えられ、商業資本的・産業資本的活動の自由が与えられていた。移住者のカルヴィン派の創設していった織物業はビロード・絹織物・半麻綴等の新規のものであり、在来 のツンフト的に成立していた毛織物業でなかったから、他の贅沢品産業・印刷業等と同様自由に従事することができた。<sup>(6)</sup> しかも、たとえギルドが存在しても、大量の宗教的避

難者の移住をみた一六一七世紀では、ギルドは漸次経済的に重要性を失い、ツンフト強制をもつ固有のツンフト組織はすっかり弛緩していた。<sup>23)</sup>この点、きわめて国際主義的であり、ロッテルダムの大商人にはヨハン・Van der Vecken のようなカトリック教徒すらみいだされた。<sup>24)</sup>この一七世紀における自由と寛容の一般の特徴は決してカルヴィン主義の所産でなかった。アルミニアン派のバルネフェルトがカルヴィン派の西インド会社設立の企図を阻止した主たる動機も、会社が西インド、ケープ・ヴェルド諸島からの塩を独占し、アルミニアン派の主要産業の鯨漁業に破滅的危険をもたらすことをおそれたことにあつたにすぎない。<sup>25)</sup>

さらには、アルミニアン派の都市商業資本が農村におけるカルヴィニスト・中産的生産者層の発達を阻止したことが、イギリスの場合のごとく近代資本主義の発達をみるにいたらしめなかつたとの見解がある。この見解についても、ドーバー海峡に隔てられて、長期間大陸諸国に荒れ狂つた宗教戦争の戦禍をうけなかつたイギリスと、自然条件的にも平坦な低地で何等の防禦壁もたなかつた小国オランダの不安定な農村と同日に論じえないことは、クラップムの述べる通りである。<sup>26)</sup>若干のみるべき工業は城砦と運河で保護された都市に局限されていた。その責任を一にアルミニアン派にのみ帰しえないのである。

何れにもせよ、ウェーバーはカルヴィニストの現世の合理的支配を裏づけるその激情に近代資本主義精神を心理的に動機づけるが、オランダにおけるカルヴィニストの激情は余りにも戦斗的で、英・米にみられるごとき同様の近代資本主義の発達の成果をほとんどあげえなかつたのである。この点、オランダにおける近代資本主義精神がカルヴィン主義の信仰の基礎の上に発達したと主張することは、パーシユの指摘するごとく、<sup>27)</sup>正鵠を失したものとわなければならない。

(4) 「賤民資本主義の問題について」 大塚久雄教授はウエーバー説にしたがって、賤民資本主義＝Paria-Kapitalismus と前期的資本とを同義語として解釈されている。ウエーバーはユダヤ主義について論ずる場合、賤民資本主義の問題をとりあげている。ユダヤ賤民資本主義は清教主義が忌避するところの——高利貸・商業資本として以外に——国家・掠奪資本主義の形態を古代から通曉していたとする。一方、大塚教授は前期的資本を商業資本とその双生児的關係にある高利貸資本として理解し、ウエーバーがユダヤ主義について論ずる場合の賤民資本主義とその内容において共通せしめている。

新教主義では「貨幣の追求」に倫理的性格が賦与されているが、賤民資本主義の精神ではそれはせいぜいのところ倫理的に無色な、むしろ「反倫理的なもの」すなわち実際はやってはいけないこととして意識されていたと、ウエーバーはいうのである。

清教徒の世俗的禁欲によって裏づけられる「資本主義の精神」のもつ倫理的性格こそ、生活の営みを隅々にいなるまで貨幣追求のため合理化し、合理的・経営的な資本使用と、合理的・資本主義的な労働組織と経済行為の方向を決する支配力たらしめると。<sup>20</sup>

さて、この場合ウエーバーが禁欲的新教主義として、第一にとりあげたのはカルヴィン主義であったことは前述した通りである。アルミニアン主義が世俗的禁欲を忌避し、カルヴィン主義の予定説、もしくは恩寵の撰びの説を否定したことからして、禁欲的新教主義の範疇外に捨てさってしまっている。アルミニアン主義は先にも観察した通り、きわめて常識的な実践的道德主義、ないしは俗人キリスト教主義の傾向がつよい。ウエーバーのいう禁欲的新教主義とは別個の立場にたつにしても、アルミニアン派経済を賤民資本主義、ないしは前期的資本とし

て、梓付論断することは早急に失するのであろう。

北部オランダでは南オランダ（ベルギー領）とは相違して、その資本主義的企業にはカルヴィン主義の色彩は稀薄であった。一七世紀初頭のオランダの資本主義的大企業には、精糖業・窯業・醸造業にライデン毛織物業等の産業と、さらに海運業・鯨漁業・捕鯨業・植民地会社等があった。それらはその資本主義の歴史的起源が、カルヴィン主義の浸透するずっと以前から成立する海上に志向した古オランダの諸企業であった。<sup>30</sup> アルミニアン派を単純に前期的な高利貸・商業資本としてのみ理解されてもならない。投機的・不等価交換、ないしは自己計算取引による前期的商業資本から、既述の通り、造船業の技術革新・近代的銀行・取引所・保険業の創設による近代資本主義の下部構造を組織化し、他人計算による等価交換的手数料取引へと、他のヨーロッパ諸国に一步先んじて商業経営の合理化を実現せしめている。

また、オランダ東インド会社は絶対主義王政時期のロンドン東インド会社の場合のごとく制規会社組織でなく、その株主への参加は自由であり、——カルヴィン派の創設した西インド会社はアルミニアン派の株主への参加を認めなかった——その証券の取引所への上場による資本の無名性による非人格的結合を実現せしめていた。もちろん、なお前期的と近代的との交錯するゾムバルトのいう早期資本主義 *Frühkapitalismus* の段階にはあったが、前期的資本から一步はみだしていたことは認められなければならない。

もちろん、ユグノー徒・ユダヤ人・イタリー人等の移住者から合理的経営組織を習得するところは少くなかったが、自由と寛容のアルミニアン派 *自由派* がその吸収力を保持し、近代初期のオランダでウェーバーのいう経済的合理主義を実現せしめたのは、激情的ホマール派より、冷静で平和愛好のアルミニアン派側にあったとみな

ければならない。

ウェーバーは禁欲的新教主義のうち、第一にカルヴィン主義をとりあげ、近代資本主義精神を倫理的に裏づけているが、カルヴィン教徒の経済生活における実践的行為は、必ずしも清純な一面のみではなかった。カルヴィン派の西インド会社の最良の取引は奴隷貿易であり、密貿易と掠奪が横行していたことは前号に述べた通りである。東インドでは、イギリス東インド会社の一八世紀末から一九世紀前半にかけての、清国への阿片密貿易の下請業者達もスコットランド系のカルヴィン教徒達であり、かつ阿片戦争を敢行したのは新教徒側の民権党内閣であったことは明白な事実である。<sup>50</sup> 東・西両インドの植民地における巨大な商業利潤を獲得した奴隷貿易・阿片貿易こそ、まさにウェーバーのいう賤民資本主義の範疇に属すべきものである。

この東西における人道主義的に恥ずべき貿易をカルヴィン教徒達が敢行した悪行は、異端の徒には救済はなく、神の恩寵により撰ばれたいくらかもののみが救済されるといふその選びの説 *Election* から、またたとえ自らが悪行をかさねても、撰ばれて恩寵をうけるもののみは最後に救済されうるといふ窮極救済 *the Perseverance of the Saints* から心理的に裏づけされるとすれば、カルヴィン主義はまさに文字通り「恐るべき教理」 *delectum horrible* である。神の恩寵は自由かつ誠真にすべてのものに与えられるとして、撰びの説を捨て、目にあまる罪や残虐な悪行には神の救済はなく、窮極に死滅するのみとして窮極救済説を捨てて、カルヴィン主義を修正した土着派オランダ人の意図は、今日にまでおよぶ信仰の自由、ひいては市民の自由、商業の自由、海洋の自由への道を開き、小国でありながら、自由主義の時代へ先駆けていったその英雄的偉業は讃えられなければならない。このような価値判断はウェーバーの意図としないところであろうが、なお近代初期のオランダ経済



史におけるアルミニアン派の功績を低評価することには、歴史的眞実を曲げる点に大きな問題をはらんでいる。カルヴィン派を近代的産業資本、アルミニアン派を前期的資本、ないしは賤民資本主義として、類型的に粹付することは、オランダ近代初期の歴史的眞実とは乖離し、たとえそれが英・米について妥当する歴史的理理解の方法であっても、オランダの場合はそのままには妥当しない。

なお、オランダの近代産業資本主義的発達の立遅れた主要要因は、アルミニアン主義が実践的道德主義に墮したことに帰せしめることは至当ではない。近代資本主義の本質ともいえるべき個人主義と自由主義に徹底し、市民的特性ともいえるべき勤勉は防波堤<sup>ダイク</sup>築造の一例で十分であり、節約・貯蓄・計算性、正直の諸点で、カルヴィン教徒に比肩する。むしろ、それはオランダ国内の重工業資源の不足、国内市場の狭少であること、周辺の英・仏の国内産業保護主義、当時の歴史的社會環境からして戦禍の絶えまなかつたことの諸要因に帰せしめるべきである。この点、フリードリッヒ・リストがその著「経済学の国民体系」のうちに述べた「オランダがベルギー（南オランダ）、ライン河流減・北部ドイツと合併する場合に、始めてその海上勢力・対外商業・国内産業は英・仏に對抗しえたであろう。」との言葉の通りである。オランダがベネルルクス体制からE・E・C体制を結成することによって、近代初期にうけた不当な賤民資本主義、ないしは前期的資本の誹りを一擲する道が、力づくで開かれるにいたつたものといわなければならない。

最後に、昨秋フランスのボルドーでのグロテイウス祭に参加された一橋大学大平善悟教授から、貴重なデマレストとデイチフィールドの両冊の貸与を許され、始めてウエーバーの触れなかつたアルミニアン主義の輪廓を明らかにしたのは望外の幸せであった。さらに、グロテイウスについても、同教授から教えられるところが少く

なかつた。<sup>89</sup> 末尾ががら、附記して心から御社の言葉がかりたい。

- (1) Max Weber. Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, I, Tübingen, 1922 I Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus, II, Die Berufsethik des asketischer Protestantismus, S. 84.
- (2) Max Weber. A. a. O., I. S. 89
- (3) Ernst Mys. Hugues Grotius (Hugo Grotius 1625—1925, Leyde, 1925) p. 20.
- (4) Max Weber. A. a. O., I, Vorbemerkung, S. 15.
- (5) Max Weber, A. a. O., I, III, Die Wirtschaftsethik der Weltreligionen, Einleitung, S. 241.
- (6) Max Weber, A. a. O., I, S. 240—241.
- (7) R. H. Tawney, Religion and the Rise of Capitalism, A Historical Study, London, 1948, Preface to 1936, p. xiv.
- (8) Max Weber. A. a. O., I, III, Die Wirtschaftsethik der Weltreligionen, I. Konfuzianismus und Taoismus, VIII. Resultat: Konfuzianismus und Puritanismus, S. 536.
- (9) Max Weber. A. a. O., I, III, Einleitung, S. 238.
- (10) P. H. Ditchfield, The Church in the Netherlands, London, 1892, p. 252.
- (11) P. H. Ditchfield. op. cit., p. 224.
- (12) P. H. Ditchfield. op. cit., p. 275.
- (13) David D. Demarest, History and Characteristics of the Reformed Protestant Dutch Church, New York, 1856, pp. 135—139.

(7) Joachim Schüller. Die Frömmigkeit des Hugo Grotius (Hugo Grotius, 1625—1929, Leyde, 1925), S. 90—100.

(8) Max Weber. A. a. O., I, II, I, Die religiösen Grundlagen der innenweltlichen Askese, S. 90.

(9) Max Weber. A. a. O., I, II, 1, S. 94.

(10) P. H. Ditchfield. op. cit., p. 280.

(11) David D. Demarest. op. cit., p. 59.

(12) Max Weber. A. a. O., I, II, Die protestantischen Sekten und der Geist des Kapitalismus, S. 186.

(13) 大塚久雄著「近代資本主義の系譜」後篇第五・第六

(14) オランダ近代初期の複合社会の矛盾に相似した軌道の上で隣接の南方オランダ、今日のベルギーにも同様の対立をみている。ベルギー南部にはラテン系の移住者のカルヴァン教徒でワロン語(フランス語系)を話すワロン人 || Wallon と、北部にはカトリック教徒でフライマン語(オランダ語系)を話すゲルマン系のフライマン人 || Flanmand が、一六世紀代から今日におよぶまで別個の社会組織を保持して分離した対立関係を形成している。政党分野では、前者は反君主制の社会党、後者は王党派のキリスト社会党を組織し、経済的には前者は南部の反宗門的の工鉱業労働者を主体とし、後者は北部の農民が多数を占め、海上商業と近代的工業に優越する。経済的には、オランダのカルヴァン派ともいべきワロン系より、アルミニアン派に近いフライマン系の方が優位にたっている。相互に別個の言語共同体を形成し今日でも国王の議会演説は両系語で繰返えされ、街路標すら両系語で併記されている実情にある。面積三万平方キロ、人口約一千万の小国に相互に融合しないこの土着派と移住者の二つの社会集団は、一昨年単一法案(緊縮法案) || loi unique の議会への上程を契機として、両派の対立の激化をみるにいたった。一九六〇年のクリスマスから一九六一年の一月にかけてのベルギーのゼネストに際し、フライマンのカトリック系労組はスト参加を拒否し、両派

オランダ近代経済史の一問題点

の尖锐的な対立と暴動の発生すらみた。そこには君主制議會会政治から連邦制への移行、ないしは国家の分裂の危機さえがおそれられた。宗教的にしろ、経済的にしろ、一面的觀察で説明されえない近代初期のオランダと相似の歴史的に根深い複合社会的矛盾を内包している。この南オランダの問題は別に詳説の機会をもちたい。

- ② Ernst Basch. *Holländische Wirtschaftsgeschichte*, Jena, 1927, S. 96.
- ③ Ernst Basch. A. a. O., S. 76.
- ④ Ernst Basch. A. a. O., S. 9.
- ⑤ Ernst Basch. A. a. O., S. 374.
- ⑥ Clapham.
- ⑦ Ernst Basch. A. a. O., S. 7-8.
- ⑧ 大塚久雄著「前掲書」第十二
- ⑨ Max Weber. A. a. O., III, II, *Die Entstehung des jüdischen Pariavolks*, S. 360.
- ⑩ Ernst Basch. A. a. O., S. 8.
- ⑪ 「成城大学経済研究」創刊号・第二号「所載拙稿「東洋におけるイギリス近代資本主義の性格」(一)・(二)
- ⑫ Friedrich List. *Das Nationale System der Politischen Oekonomie*, Jena, 1920, S. 112.
- ⑬ 大平善悟教授のグロテイクスに関する最近の労作には次の通りのものがある。参考のためここに附記させて頂く。  
「グロテイクスの *De Jure Belli ac Pacis* に対する考察」久保岩太郎先生還暦記念論文集所載  
「グロテイクスとその自然法」一橋論叢、第四十七卷、第四号所載

「グロテイクスの *De Veritate Religionis Christiana* と日本」英修道博士還暦記念論文集「外交史及び国際政治の諸問題」所載